地方凡例録　子

成本.193

ワ3
6425
1

地方凡例録巻之壹

一 地方總論

一 井田大意之事 道法 溝法 制軍賦

一 地方之數級之事

一 國郡里數之事 附 地境尺里始之事

一 御當代地方始之事

一 上方関東國分并田畑不同之事 附 御料私領之國々之事

大正十三年十二月廿六日 成本悟精氏寄贈

門 73 號 6425 卷 1

ケ 3 6425 1-12

7

一 石高之事
附分米之事
一 貫高之事
附六貫一返軍役一騎人数之事
一 永高之事
一 反高之事
一 小物高之事
一 出目高之事
一 町反畝歩之事
一 無地高之事

一 邑高之事
一 野高之事
一 海高之事
一 山高之事
一 桒高之事
一 楮高之事
一 机高之事
一 除地高之事
一 除外高之事
一 込高之事

一 定高之事

一 取成[illegible]之事

一 以一高之事

一 弐拾五石之事

一 田畑上下遠之事

一 四ツ八之法之事

一 地方凡例録巻之壹

地方総論

天地生ニ万物ヲ可求道なし扨周ゟ末世ニ至霊
人利用厚生之道ヲ以て仁政を行ひ井田を以地方
之始源也とし我国之中古君臣之諸官を定らしむ
文武両道ニ分ち文官ハ民を制し武ハ民を懐け
武ハ民を衛ル万民治る事ニ始ハ民分ち四民とす
十二州民家ハ八十姓ニわかれ此民共を称し百姓と云
是天下無農不成耕而収の勢を一国之八分ハ納家用
之有餘を以凡膳ニ備ひ無礼之用ニ当て無為ニ

士夫ハ国政を領り社を建て其民を治し其民をし
て安居をなさしむる也其下ニ民ありて耕農工業を
するもの有るを百姓と唱へ其外工商と階級ありて其
業ハ宮室衣食住しこれを離るゝ事なき
なし中にも食を最先にすへし五穀の元ハ百姓にて
農作勤労によりて民を養ふ又宮殿楼閣彼舎
民屋を起るも用る所竹木等作る根源
麻布木綿ニ至る宗根とも彼ハ土地の中より生て又
河海沼池とも其他土地方に属し悉く農民
の手より出るものなるれハ農民ハ産業の根本なるゆへ

後に百姓方を以て第一として百姓乃二字を御
宝と訓して天下の根元之御主意を立て被在て
三民の用ゆる事を節するときハ中治まる事なし
然るを政の用ひ賦税を重くし庸役を専らし
する時ハ万民難渋方に農家ニ力を尽すとも
作物不実法則を逃散して田地荒れ里を成し
有之民の至れ人ゆ力至る事なく人ハ中国乱れハ国本
しもかを好ま民皆く時を立て極る所ハ定
其ても民服則民教化教訓民服ともに是正税
を納る事民をとして皆志ありし其中なるか代

地方之事ハ郷村之時ハ万民も尽く手業なく
民乃戸口繁ハ耕耘の力も足て五穀豊饒して市
無不足ハ民安堵す故海内太平なる事

一 地方之業といふハ先地之経界を正し地味之宜
を弁知し其田畠を検地して水代を正し溝洫
推知して地味の宜を以て石盛の高下因て奉る民の
之を無慫恿に格して宜く究明の為ニ不三思ひをして農
事之時を不失務耕耘肥培収納を時を以て遠
憂ひ以之不怠様に教導し租税を極究又ハ国の大
事として八尚可有之事し時疏九河注海決汝
漢排淮泗注之江利し水を治て八年外に
在ニテ三度其門を過て不入其徳印ニ以中国食
を得たり孟子の謂ところ諸侯の宝三つと云内一
土地なり礼記月令にも季春月命司空曰時雨
将降下水上騰循行国邑周視原野修利堤
防道達溝瀆開通道路毋有障塞と記せるなど
其治之法なる者経理以邑里を出し溝洫用水川
除ま修補せしめ土地之広狭を慮りて五も田
之善しやしき民の貧富を考て其吏の安静なり
地割用水等付テハ出入論なるなく一都市

村里役治ハ訴訟等を裁断し治事若朔ありと
云ニ依て不服理非明白ニ弁論せずし吟味ニ序
ニ而双方の人ニ申聞るを又云理避不避ニよりて贔屓
偏頗の心有るものゝ様ニ私儀様て元味して居るし
悪しくて律令ハ天下の治る法之令ハ亦方教諭ニ而
科を犯すもの悪事律ハ後悔して善事ニ進ミ罪
なしに申す事をならしむるの意ニて罪を犯させ後ヘ
甚高役罷出人との事ニてハあらん明律ニ大意
ニもあるなり常ニ法令を正しくして
罪人を教戒し

而事あらバ辞譲謙遜を以てすべき事ニ而事ひとつ
平安に治るをこそ教へ而ニ之変の心掛肝要也
訟の絶ざるは村方困窮の基ニ而竟に諸人の大
害となる様人ハ無益の心得に而出入と申論も致
而事々之天下清非之ニ而無理と云事ニ書ニ十分ニ
理と云へハ無理と申す時ハ要ス理ハあるべきニ而
之事ニても天下ニ理向もあらずして理有りとも無理
向を指理ありて主の理ハ一向立たざるものゝ負化に
成り立て理非ニ不拘負も亦勝まし心得迄
自己ニ有事ニハ心眼曝平ニ偏し

就中今正路ニ帰ル事有之候ても公事出入公沙汰ニ取溜え
ニ湊候の数も利無理ニして其式ハ味ある事を
生じ出来なし平日ニ公教示し其流を村役
人ともに納得して村中末々のもの迄教へ候はゝ
之常ニ下々まて心懸窮ある村方ニ限り公事出入
不絶又示し頼訴訟も多くなりて公儀ニ百姓共
落ちく後ハ退転ニも及ふ者繁成村方ハ公事
出入頼事なりとも忽にも不成村中も難渋
全く窮ニ至りしハ乱心中ニ今日の営ニも差支困
之欲心も起りニ羅成公事出入頼事ニ至り又是

なき事なれハ租税庸役ニ疎なく程役を省
なきものハ農業ニ励し若農事ニ怠り惰成
者も之有ハ教示して中揺かれ川らせ不叶とも不用
不届者ハ其儀飛し段々不届なる時ハ百姓治
仕して農業相出精し小前も豊饒ニ而
村方も難治ハ自らに困窮ニ至り公事出入
頼訴ニおよひされハ孔子ニ曽ニしても訟
事を聴も猶人のことし遠ク事なし聴遠ひ乱様も
其間柄ニ其後取捌遠ひなきのことなれハ訟の
節ハ其様ニ諭し所中なし和ニ道なし也

宜敷相続の義も取極ニ可申候ハヽ早々可致候
旧来無之ニ候ゟ作り出し来り候得共不宜候の道々
之て八千年の末と不治者難渋の百姓とハ実ニ
疾ニ御慈悲を被下候ニ付御年々決御を奉仰候
難渋候処ニ御恩沢に浴し候ハ君臣上下の民父子の
如く情ニ浴ひ民ハ父母と相敬ひ候ニ付候ニ
願る通ニ実を以て窮民共の手当致候
上下共とも豊作孔明しての無心掛け其上に
上下和順なる時も可然も豊年安堵致候なり
地方ニ携る役人ならハ三十七年の心掛申事一なる事

一　近世ニ至り天下泰平に付町部迄も奢を好む事ニて
質素之風俗を破り百姓も農業を厭ひ武士之風ニ倣
事ニ而在所商売ニ拘り風俗をかえひ自ら耕作を疎
成候事多し是等の事ニ付て吏の教戒ニ寄可申事
迄ニ至り毎日村吏の教示致候て元来卑民ハ愚成
ものなれハ政道を知らず候ハヽ則必根本ニ立帰りて
本て耕作出来候得共何程ニ不致も是迄政道を相守候
ものなり聖人も唯女子と小人ハ難養と申置候
不孫や遠ざけ則怨もとて難治ものなれと
政道の如く申す一政事相撰候ニ付文字を以て合せ付

仁心忠貞にして能人の習ひを知て見ル
貞偏頗の御法なく親疎の差別ニ不拘人を
仕ふニ之礼を知り政ニ携る事更ニ忠直貞実
成者哉擇て是哉勤ニ登用し民事ニ携る者役
むきむるニ一己之情ニハ不及公実情をかんかへも専
来穀而田畑ニ之をさるニ忍ひし民ニすへ又仁恵
厚恵也も難之民ニ拘ニ年貢諸役へ終候之意を
能ハ一下之治る地方之儀は民生の為勤メ
すへき事

一 凶作飢饉或ハ流行病等ニ年柄之夫食穀類

平年ニ於ても又ハ平年穀ニ而も為ル時ハ可有之事よふ草根
小倉物ニ可成品類へ兼而田畑ニ而植附又は之可置
納免並凶年ニ可凌方便年中ニ心懸を施へ其朝
夕ニ為之ニ草根樹根等之取扱之事之究兼る事ニ而又
地方役之中ニ心懸之有るへし

一 民家の為ニ植置へきこと樹を垣へ植て数株を法ニ不
為ニ而地方ニ而振作ニ而又ハ取扱の便宜ハ勿論出来
心懸可用事

一 地方之見扱ニ而前条之通年ハニ及之兼而高役事
添ル心ある法書付帳面ニ而法令之通ニ而以て

乃事におゐても以之乃ち御吟味いたし事御法の儀
を鑑候ゆへして事之條を遂ケ正し猶又是を
其國其傳来之事ハ則事共ても弁して
其上帰順致ニ付ひては法令を崇敬し法式
出候も不宜事曲様ニても君子の行ひ不心服之儀
紀之乱れ至るは腹黒法之法ニ其国之風謹慎
其ハ法而害済之候て八洪古今法度之国風ニ例
を新致之段ニ而ハ甚大切之儀然法度ニ従
之例ゆへ甲州事を能ク後世迄も是ニ云又弐
可服ス者之申合ニ従い之者を論し段之也し

已ニ甲斐國御領國となりて府中ニ於て服を以
而ても崇敬すへき事
大神君の御厳命下に而武田家ニ而政務を如何しも云之御
段ニ甲州一國之分之御改代遠ひ候武田家之も祖
税乃法々之事を信玄時代の如くにと為命下され
國中服し一統平安之法令ニ依て其法を守り候古
法之宜事之趣段ニ是を以而知らるへし
但甲金之通用之出判是を分ケ甲金之極印之事ニ而
御極印之小判之事し判金判之金判金中
甲州金之之事とも来ハ之事御定てよし能く出判

天正年中ハ壱両金ニ角有是ハ今ノ銭ニテ
稀なりし信玄時代之金中の甲金を云ふ今も七ト
両程ハ京目ニ而七両五毛ニ而今金壱両中ハ今
知る之なし　信玄時代の金を古甲金と申て今
當時甚ダ通用無之由ニテ京價壱両ニ付今
金拂底ニテ稀なり其後松平甲州代ニ甲金を
吹せられ當時安金ニ而通用ス形ハ両目ハ信玄
代の金と同し又金壱分の價ハ穂銭百文
余ニ而上之文厘甲州ニテハ百文ニ付も
當時古甲金ハ松陽銀ニ而不相成もの也

して其壱ハ文金壱両一倍ニも當額金ニ而
松平出テ
御年寄衆甲府ニ来テ後度國ゟ金ヲ以
甲州一國ハ金ニ而持之桝も他國ニ違ひ京桝ニ而
入甲州ニ而ハ三升を云二升五合を京桝七合を
小ト云ふ蓋し米穀其外共此桝ニ而一國通用ス
依之甲州ニ而升ハ京桝ニ而升也一國京桝不
通用ニ而金も甲州桝を用る所京桝ニ文金
其通用せさる事付諸ニ京桝ニ而物を
取ニ而付而京桝諸事ニ京キハ四倍

枡目間違ひ有り枡ハ旅籠ニ性
御年貢以貳して甲州ニ居住し　江戸の枡
旅籠旅籠ハ不用ニ年貢も大切ニ付きて信玄
時代の石代当時
公儀ニ而御用ニて旨ハ庶さ代ニ而用ゆる所之
家作も不残切破風作りニ而其外更ニ金子
ととハ凡而も又〳〵信玄政事弐今ニ用る事之
破損質する子孫ニ良政さへ我者所あハ民ニ厳法
如常世之庸人眼前之利ニ流し末世ノ好悪ともに
ふ弁我破し法令を出し中民ニ而後乏ろし後都而

害後求る事只古法従改むるハ義ニ不宜事之
安民之用様ヲ其節弁事一ツ之基として地方を云ハ政事
之要務にて地之間其れ旅籠万縁離る事なる是
万端不代無双至賢ハの道をあし久しき学
尽き信ずる習術の器もあらハ地方之印商ハ
継之主業にて及ハ事にハあるまれともに唯其大ニ云
をも尽るのみ

一　井田大意之事

井田ハ三代之貢賦にて中ニ於て周の末戦国ニ至り
其法廃し租税の収法遷りかはりたり

本朝ニても是を摘て人皇十五代
神功皇后三韓征罰の時井田の國法を彼國ゟ
収め給ひ是を敷ひて租税の法を租定め給ふ事ニ
元来井田ニ而は其道ニ適たる道にして今末世ニ
至而用ゆる事なし地方の人ハ井田為る事を傳て
唯其大意を述るのミ都て民姓の難なき事を専と
治の本なく順ミしも若ニ治の不足して無事
を考ふへし故ニ井田を知てしく仁政を以
年貢収納すニ而言語なく力ニ抜族なり
國乃荒廢なく政ニ寄政事なく國々の豊盛し

稲熟して民殺せさる様ニ古へ而此地方の根源
也とそ

一 夏乃代ニハ法（法）水ニ定して耕作させ田地を定め
有て一夫ニ五十畝（田畑者三者之反歩之儀）を下割して公田もなく
其内より五畝の入を十分一を年貢ニ納めさせ末世
ニ至りて貢法を用ひて殷之年ニ同を援ひ定め
田畑ニて定免を云如く凡し極て豊之年ニハ民ハ〇〇
少しも違ひ年ニハ違ひなき之田地を取見る事もなく
右ニ依し

一 殷乃代ニ至て法（法）水ニ〇〇く其地も田〇く田地潤沢廣く

殷始メて井田の制法を定め六百三十畝を（長六十三歩 横四十歩）
一井として九区に分ち一区毎に七十畝宛其
中七十畝を公田として残る五百六十畝を八家（八家へ七十畝宛）に
与へて各七十畝を八家の力を合せ公田を作らしめて
其穀を公の用に納むる此を助法と云公田七十畝の
内にも廬舎とて十四畝川（毎夫廬舎一畝七十五歩）残五十六畝は実の
公田也公私田とも一夫七十七畝にして其中より
七畝の穀を公納する故乃下十分内税にあたり五畝の
八十分一つより税なし

一 周の代に至りて田地多く成り一夫に百畝宛与へて

一井乃百畝（三百歩 三百歩）として一国を百畝にわけて王城
を始め郷遂十二ヶ国は国中として貢法を用ひ
一夫に百畝宛与へ其年の熟と小熟とに応じ百畝
乃内より十畝の年貢を取る此国宗法を用ひ
其外は遅遂も皆田地も総て年貢へこれ出る八
一井乃百畝の中に公田を別て宛先毎年換
へしてて其年の豊凶にて十分一の税を定め
小家出しもやうにして又堺地を定め
鄙は八分十分は郊外として助法を用へ一井
乃百畝の中にて一夫に百畝宛与へ公田四百畝の中

五家八夫乃廬舎二十畝（一夫ニ弐畝半）を引残り八十畝宛
乃公田として公私田とも八百八十畝也しかして私田も
初より渡置きにはあらず一緒耕作し其出来米の
残り割付公田八十畝のうちを年貢に納め其余の
税に当る殷の助法にして又惣し其残周の徹法
也此殷の助法も周の徹法とも殷にては八夫
乃受田諸とし作り公田中を八夫力を合耕作し
周にては公私田とも八夫一同に耕作し収米も所数
自作の者に割り出し王城の近くとは貢ひ一国二法
を用ひ貢も徹助も徹之とは云ふ郊外周の徹法

なる事徹は通なりと八家力を合力して耕作する
故通也又税とする法は百八十畝を年てならる所謂之
故に天下に周家の税法として百年の豊凶也とも
国中の民皆同様なる事

一　一夫ニ上田ハ百畝中田ハ二百畝下田ハ三百畝宛与へ
上田ハ一年休耕し中田ハ二年休耕し下田ハ三年
宛休めて各作る作らせ三百畝宛与へて年々百畝
宛作る積り之一夫年々同じ田ハ作り作らせ居る事
取組て作らせる也
　但田本あるも此古ハ休めて作らせて陽々年ニ作る

し中る世ニ畑作も同し畑も同し菜物
作りてハ添尻ゟ余計ニ出来する故
其品を作抱候ハゝ主ニ無尾く納る事なし
勿論稲作之儀毎年耕作之儀ハ得と見ゆる場所
ニ而麦菜種を作る作ニ而田ニて一作納り候も
稲作之儀是ハ格別の事米多く実取水損ニ
而ハ無之年稲作実り一ヶ年纔ニ四ツ半余り弱く
又ハ年々として凡二ヶ年分も取りて足さり候
此右のおく二ヶ年分も実生ましして纔ニ作り
ニ而ハ出来申候にてもハ入申すとも無之ニ減税

ニ而出来ニ有る候之事ハ在る候ハ唯麦畑作ハ一ヶ年
も二ヶ年も豊作ニ而してハ纔二分三毛畑作
在るハ閑ニ而田方ニ而凡て而耕作減ニ候ハ
日本ニも水腐等の為割地ニて一ヶ年毛を
之を見割書て作り出来る国の徴法なし
候事なり
男女中並耕作する者ハ五反の田を作り　耕作之者ニ而千
米ニ而取れハ公儀口返ニ十五石ニ又無顧之外ニ作年文
迷又譲渡作田地を配分く義ハ二十七も五十六石
とあれハ　公儀分田二千五反歩三ヶ年二十石余

而成書室を得ては室のかく百畝よりなしにて
須百姓一新に成るへき也此人を為る程新田を開
田地増有へからす

一 五畝の宅は毎二畝半ハ田の内にて廬舎とて其
春耕作する時移居る家也又二畝半ハ城下に在る
居村なる是ハ邑居として農時を仕廻て城邑に
あり安居する所なる是宅也山川沙路の所なれ
一ノ内に入れて年貢ハなし是ハ合て毎五畝の宅と云
なり二畝半との所ハ廬舎と号田中にて九間はかり七寸四方
に出来る也廬舎の地垣として甚堅く桑を

麻桑を植て布帛を納させる為之麻桑とも不植
農業を怠り遷せる者あらは罰として布帛を出させ
又商人手工家職もなくして居る者ハ夫税家税達
一夫出させ年貢を出させ又農人に田を荒し農業
をも怠る者ハ屋の税にて年貢を為出ること是ハ
民にあつまらぬ様をして以て村法を定め要禍之
事を探得て民に均しく民に怠惰を戒めて出
殺之大罪の懈怠をなすハ罰ハ殺すなる計にして用捨を
忽ち出させたらしめて家業を積出させる為人
乃是穀なり

一 祭祀の入用の為圭田ト云官より出すところの八家ニて
分る所ハ圭田の外ニて圭人田畝[illegible]

一 圓径壱尺八寸[illegible]
[illegible]積之圓の一歩[illegible]八寸[illegible]
[illegible]圓の一歩八十歩[illegible]して一歩[illegible]
[illegible]の田[illegible]積て[illegible]
[illegible]
圓の面積[illegible]
[illegible]
[illegible]田[illegible]
[illegible]

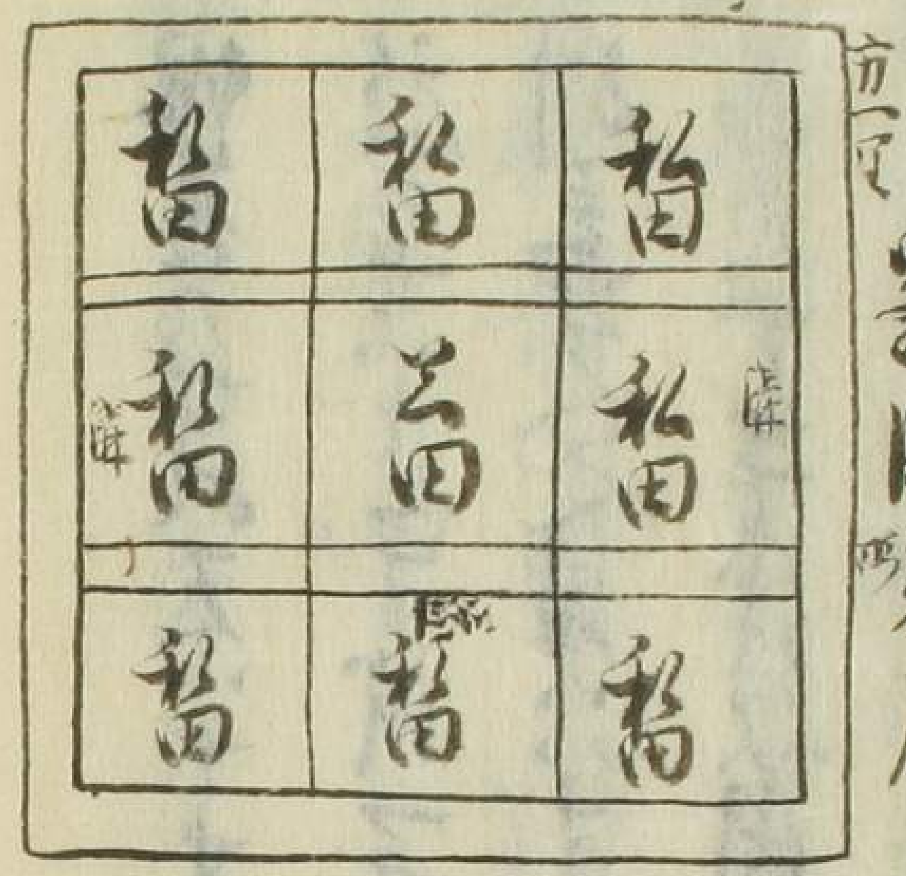
但[illegible]世[illegible]八十寸[illegible]
[illegible]の世八十二寸[illegible]日[illegible]の[illegible]
[illegible]之周[illegible]周[illegible]之周乃
[illegible]十二寸[illegible]圓[illegible]
[illegible]

一 圓の[illegible]八[illegible]日[illegible]
[illegible]
[illegible]十[illegible]之[illegible]の[illegible]
[illegible]して[illegible]積[illegible]
[illegible]田[illegible]十町[illegible]の[illegible]

乃之積りを知る事

一 一井の田是九百畝にして民家八丈ニ百畝宛与へ其中
百畝を公田とス経界井の字のごとく溝洫を以て
井田と云縦横の畔の分を溝を除て九百畝なり

略圖



一 一井乃夫九百畝也一夫百畝宛
之間に遂あり遂之上に径あり
一井井之間に溝あり溝之上に畛あり
ある事

右圖乃如き一井を四つ合せたるを邑とし二里四方なり
邑を四つ合せたるを丘とし四里四方なり丘を四つ合せ
たるを甸とし八里四方なり甸を四つ合せたるを縣とし
十六里四方なり縣を四つ合せ之を郷とし方二百里四方之十二國を云遂也
し二十國を郊縣とし二千六國を郊都とし州
五戒を合二万千里也

道法

徑 遂之上にある小道也牛馬を通し牛馬の小車を通す一夫との路
剛牛を通す道路なり

畛 溝之上にあり人一丈の道にて車を通す路にして車通る道

塗 洫之上にある乗車の通る広き道なり

道　路ことは大道回シ分大道ハ出る道之
路　川ニ舟を渡して往還する大道日本ニ而海道抔と云
如なり

溝洫法

遂　一夫の百畝の間ニある之溝之深サ広サ二尺つゝ用水溝也
溝　十夫井と井との間ニある之百畝の横ニ在之深サ広サ四尺つゝ
洫　百夫在と在との間ニある方十里の間四ニ在之深サ広サ八尺
澮　千夫ニ有る百里四方の間ニ在横ニ在之深サ広サ二尋（一尋ハ八尺 小注）
川　万夫ニ有る百里四方の間ニ在之深サ広サ無限大河なり
右遂溝洫澮川ニハ水道又径畛涂道路の形路ハ一丈一丈

百夫千夫万夫の間ニ在之候今ハ日本ニ而東海道中仙道ハ
国々ニ出ル道也又千夫ニ在一邑一郡ニ出ル道大中ニ在之溝も小溝ニ
大溝ハ千夫ニ在小川ハ流ル落大河へ流集りかく一井ニ限る
遂径ハ以て井溝ニあるものなり
但畛ハ大川表又ハ畔ハ京師ニ通る大路ハ車ある
ある車ニ帰ス双ハ小路ハ二帰ス双通る程の道なり
今ハ道ハ具ニ安堵町名河大路河小路と名付
るくるなり

一　今世出羽ニ沼沢ニ国ニ新田を開きても水路の消長
酌ニ法又庵舎の地甚地形ニ應径界ニ遂溝の法井田

乃法織もを味ニテ其義ヲ立テ彼術ニ加ヘ候らしし

一 井　方一里　九百畝　民家八戸

畢竟之数ハ出之　二町十七間七尺五寸四分方
田積三町二反六畝廿歩余
一戸ニ付四反五畝廿一歩余

一 邑　方二里　則四井　三千六百畝　民家三十二戸

畢竟之数ハ出し　六町三十四間一尺五寸四分方
田積十四町四反四畝十一歩余
一戸ニ付四反五畝廿一歩余

一 丘　方四里　則四邑　一万四千四百畝　民家百二十八戸

畢竟之数ハ出し　十三町八間三尺八寸四分方
田積五十七町七反七畝十八歩余
一戸ニ付四反五畝廿一歩余

割軍賦　戎馬一匹　牛三頭　甲士三人　歩卒十八人出ル

一 甸　方八里　則四丘　五万七千六百畝　民家五百十二戸

同上数ハ自出し　二十六町十六間六尺八寸方
田積二百三十一町一反九畝十余
一戸ニ付四反五畝廿一歩余

割軍賦　兵車一乗　戎馬四匹　牛十二頭　駟馬車馬四匹　甲士十人　歩卒七十二人出ル

一 甸方八里ニ各一里ヲ加ヘ方十里ト成リ此十里ハ百井ナリ

一 県　方十六里　則四甸　二十三万四百畝　民家二千四十八戸

日本之数ニ直シ　一里程三町三千三百六十間[illegible]万
畧[illegible]八町[illegible]余
[illegible]八十[illegible]余

一 都　方三千二百里　則チ縣　九十二万五千六百畝　直段四百九千二丈

日本之数ニ直シ　二里ニ余り七間[illegible]万
畧[illegible]余
[illegible]八余

都ハ方三千二百里ヲ大差ニ九甸の法ヲ[illegible]
[illegible]万ナリ

一 同　方三千四百里　則チ郡　三百里八万五千[illegible]畝　直段[illegible]八丈

日本之数ニ直シ　[illegible]町[illegible]間[illegible]万
畧[illegible]
[illegible]余

同ニ方六千里ヲ[illegible]九甸の法一万八千[illegible]ナリ[illegible]郡[illegible]の
海済集ニ[illegible]百[illegible]車百乗[illegible]國也

制軍賦　[illegible]車百乗[illegible]人[illegible]　甲士三百人[illegible]人

一 王畿百乗之國ハ方千里[illegible]四百万井九億畝　直段八百万丈

日本之数ニ直シ　八程[illegible]十六町[illegible]十[illegible]間[illegible]万
畧[illegible]万[illegible]
[illegible]一億[illegible]十万[illegible]余

一 制軍賦　兵車万乗　戎馬四万疋　牛十二万頭　甲士三万人　士卒七十二万人　惣人

周ノ法井田ハ兵乗大同小異アリ百畝ヲ一夫トシ三夫ヲ屋方
田税為トシ三屋ヲ一井トシテ則方百畝之十井ヲ通トシ
十通ヲ成十成ヲ終十終ヲ同トシテ其方百里一万井九万夫
畝以定夫ノ定地兵車百乗之國之十同ヲ封トシテ其方千里
積百万畝ヲ十万夫乗之十万畝法領ノ定地千乗之國之十封ヲ畿
トシ方千里万乗之國天子ノ地之大國小國君卿大夫
ト申ハ夫ヲ配當シテ定ム今ハ不用之事井田ノ法ハ容易ニ
下書尽シカタシ是レハ略シ井田学者ヲ此儀ヲ尋テ可申也

一 都而廃シ今日本租税ノ法四公六民或ハ五公五民或
ハ二八抑制雖其法ナレトモ其代ニテハ貢助ノ法ヲ遠ク離レ
不軍役ヲ務ル事ナシ和漢時世隔リ井田貢法助
法トモ今ノ人合ヌ事ナレハ不残地方ノ事ニハ井田
為ルニ従テ租其大意ヲ述ルノミナリ

一 農夫耕作シテ所獲一夫百畝（田畝ニ因テ収ル上中下有）ノ田ヲ上
農夫ハ九人ヲ食ス其次ハ八人中ハ七人中ノ次ハ六人下ハ
五人食シ中華廃ノ其食ニ其品ニ応シテ農
夫ニ耕ス五人ニ而貢法ノ税ヲ出シ積テ見ルニ百畝ノ粟
十石ヲ収リ出シ積ニ而其内ヲ石五斗年貢出シ

残ニ石高并ニ高八石八斗高并ニ合テ夫人の當抱り残
り石斗高并費出して家用ニ當ルといへども夫人ハ乃
ち勤陰陽之用一句不足之貌とも和漢とも農業
外の稼もなく又農事より収納せる諸掛り石高をいふ
事なし　古ハ貢法として之へ石を積り之ヲ世事
制の程ハ云ふ民の法ニ其民の生涯ひハ飢渇なし
ては時世遠ひハ人古の積りハ過て飢用當世ニ當
乃事なり拾而右へ之を分りて今ハ時ニ當て政務を
取扱之者ハ之を參ふに能ふ所之者て紀せものゝ

一 地方之數ハ數之事

附田地並反之畝歩濫觴之事

夫大極ニ而陰陽を生し陰陽を成陽ハ天ニ生して圓陰
ハ地ニ止して方之天ハ清外なく地ハ宗て持せる之徳
東西南北四方宜く陰陽合和して万物生じて
地四方纔合て其の數を以地方の根元とし地方之
称せる事ハ勢而天地の一可く及ふる耕作を縁
諸地く扉せ係る之極まりし取て其地ニ消る事を
基して熟名地方を唱り物名ハ盈ゐる數之陽ニ應し
三代ニ井田之法も名て四方を田地一歩と定し之様
ニ而然者可名所を一丁と定一丁と定り之る歩ハ一丈を

出云備にて一村の間一丁といふ事ある由云人へ参り
井田にて此六町四方田畢四方四町ゝ地にて場所四方井を合
とみる形邑に留ひ列一村にあらねは不しもけり少し沿て其村
このあたりの町数をえらみ六町を一丁とさためたるものなり
本朝も上代より六尺四方を一歩とし六十を一段と
歩を一反とし六尺を一間六十間を一町六町を一里と
其頃奥州多賀城石碑の里数も六町一里なり
中古より六町を三十六町を一里と改む陸奥国にも
古制の如く六町一里之（白川関より白石迄関東の三十六町一里を今奥州六町一里とす）國の数是
今も國にて六町一里まても六の数離等は半なし

畑田地一歩は古人六尺四方を一歩とし中古まて其間
六尺五寸を一間とし一反三百歩を一段とし田の段歩も
六尺五寸四方を一歩として津ゝ也一反六尺を渡
六尺一寸を一間とし太閤検地に至て近く六尺三寸
六尺少くし屋舎なとも一間六尺三寸二分京間
出して六尺五寸田舎間と云ふ田地にも検地時
太閤検地に六尺三寸四方を一歩とて云ふに一段し
あるも既に古の歩を六尺三寸にして用ひ来る
今世古へ復し六尺一間之
然るに猶て今世勝手次第秀吉公治世に

宮部善祥坊山口玄蕃頭ハ廣衛門の道ニ兼め
以来御の秀逸なるニ依て両将命せられ諸国曼
道路を検地せられし時ニ悉く殺すへ其后ハ二言を
そをも反とし殺すも過ること八て化の方を合める
殺しも甘界一尽く満てる陰陽殺成ると尽る事八欠入ル
の儀あり又堅もなく横もなく陰陽合離なし
五乃殺ハ六ケ年孝ニして陰陽を合わせとする万物
五行離る事無くて五行とあらぬ殺して陰と成て陰陽
合離して万物を生じる気質ありて田地を上の殺と
かへし生しる事として天へあかり上の方西関ヨリ出て検地とテ

越前國ニ到る時太閤遁ニ丹波國ニ而上下せしむ
東大太閤検地をし又云を反ニ言を為なる八足利
義昭将軍の時代ニ至て人の軍役尽ニ
安部ハ人為ニ言を以て役なる云々（云々ハ未定）其後
祥ある事と云八　太閤検地ニ時陰陽ニ儀をもちて殺
をかへニ言を以て殺す事を以て理を以て儀生れとも
居るをハ後へ附会し従ふへく足利時代孝殺し
為ニ言を以て殺しうをかへしん

一
國郡郷里名を以て事
隋地退く尽く理始ニ事

人皇第十代崇神天皇は四方の夷狄を平定し
給ひ第十二代成務天皇の御宇五年乙亥二月始て
諸州に於て國郡を定め縣主稲置を國中に置給ふ第十六
代仲哀天皇の御宇貢物を定め給ひ第十五代神
功皇后三韓を征伐し給ひ亦代井田の制法を
他國に行給ひ其後又數百歳七道をもて國の租税
增事を擇ひ許諾を定讃岐語を奏す
編ミて天下の農を勧め給ひ租税の法定るところとも
とも代々郡縣郷里との據もなる事なし
武天皇の御宇海内を統て州を定め國郡の名

年号は大宝元年中分條令も定め國は其名
霊亀元年地理を改めて更に文武天皇の年十七乙
元年去る國の内某等證に令と勅ありて同十七乙酉
年七十七年迄凡百三年の間に多く國の州郡縣
以て邑巻を定め攝津國を河内國を離て攝
國を秋田城を定め東國を守護させ最北國
去年に府を建西陲を守し給ひ東西は武藏并
を割し後海より中古の制を定めて國に也
吉備を分ちて改正し古今西國七道ハ不詳して
終る中世時なし三段勅令を以て天下の地を

巡検ハ境之異様定ニモ田畠を忘し并ひ道路
溝渠堤防之修補せしめ先田畠ニ於テ上方を一歩
ニ至ル迄寸歩ノ一反迄しめして土民寄中ニ於テ一邑とし
里毎ニ長タル人ヲ撰置テ尺ノ検擬せしめ先秘税
乃法も稍ほと立テ巡検乃代々のもの取扱の
地ニ於テ巡検理論ヲ与ル事を時を始めとし

一 御当代地方始之事

総語之地方ヲ唱ヘルハ政務之事ニ而総て田畑
収納諸帳面及調ヘ之総計ニ而已ニ限ル事もあれ
郡中経済之任成もの聖賢の道を行ふへし理也

安民乃要を不忘地理ニ委敷用水川除堤防等之
并利ヲ考へ稼穡乃道ヲ知り国益をなし不毛之地
を開ひ并ニ損益ヲ勘弁し農業を不失様
教導して民を撫育し其上ニ訴訟等之裁許私
なく理非を糺明して国家安全ニ治め
并に其事を含味し当代の時勢をも能く穏和取扱
ふ代官役ニ而ある之事なる故今地方役を用
ひられし事を心得へき民の難苦をも考へ勧農の
勘弁もなく之理ニ取る事も知るへく
隠田之類ハ物ニ寄ては事ニ触て穏便ニ取扱ひ民の疲労

さて又紀州眼前の利徳のミ自損よりも出
時の勢ひ仕法出来し並宝暦年中高名之人名跡
紀州より被召出候人を地方功者と云ハ是也御中之
是ハ紀州流の事にて是も一つの治方也して地方之流義
出る也尤享保年中以後御当家ニおゐての地方ハ紀州
流と関東流との二流を紀州流とも　神祖御治世の
比伊奈家ハ代々相続致し之人伊奈ノ道を以て並年
通達し先祖の職司として御代官並御勤候
之所　朝散大夫備前守と云御人より始る関東流と
同御代慶長八卯年関東郡代と云人町奉行職

多くしか紀州流の並元祖と仕法を以て道を立て
委しき地方功者の御人より始り紀州流
後々は何となく其上子孫の後継して今ハ関東
流紀州ともに自ら様々相続して
世に伝へ継して　当時御料に地方の取扱有之也
紀州流と云

一　上方関東国之並　田畑不同之事
　　附御料私領之国之事

関東関西とわかるは往古逢坂の関より東の国を
関東とも坂東ともいふ関より西の国を関西也

昔ハ近江逢坂の関を限として今ハ箱根の関を限て
常陸國迄八ヶ國を関東といふ當時御安堵ニ而
上方ニ而ハ関東ニ而も遠く九ヶ國を取扱ふ事なるべし

関東方ハ　武蔵　相模　上野　下野
上総　下総　安房　常陸
伊豆　甲斐　出羽　陸奥

此ヶ國迄入て拾四ヶ國を関東方と云

上方ハ　山城　大和　摂津　和泉　河内
外ニ
近江　丹波　播磨

廿三ヶ國迄入て畿内上方と唱へ五畿内ニ州と云

右之外東海道ニ而中國ニ而北國西國北國ニ而茂都而上
方ニ而も唱ひ上方関東とふる時ハ右摂津國々
関東ニ方と云其外之國々ハ都而上方ニ而も西國ニ而も
別ニ而ハ取扱事ある事ハ五畿内東
海道ニ而小國ニ而北國西國ニ而と云へり

一　上方ニ而國之事増少ハ田方之事畑方之事行
積り関八州ハ田方多く畑高少ハ伊豆甲斐出羽
奥州迄ハ大底田畑等も有総而関東ハ畑方ニ而
九出羽奥州之内田畑平均石ニ而も之川附等

上方畿内を知来度といへとも元は一限納るる關東之
永荒と同様なるものなる事

一 御料所在之國これなし
能登　尾張　伊賀　志摩　備前　若狭
因幡　伯耆　出雲　周防　長門　阿波　土佐
淡路　備後　大隅　薩摩　壱岐　對馬
右取捨國御料在之其外國々へ入組御料
少しあり

一 石高之事
随分可考事

石高と云ハ村高之事也田畑検地致し土地を直し
上中下之位を定め石盛を極め田畑反別を定めて高を
寄合候を石高と云則村高也右之通り高を同
様之村々も定候ハ田畑の位並寄の無之通之字
並高之物成ハ不同也田畑の位違之境
并道路ニ而村違ニ相成候而も近き所も
同し石高村高とも云古ハ貫高ニ而数と云高家
数ニ而取立候而知行之村を唱候事不鎌倉将軍
家之時代ニ至り文永之頃より石高ニ成り足利将軍
家の時代東国西国ともに高と成り一統ニ相當

給扶之の村也唱ひ来ル後圓集ハ永るる所より永る
事ヲ給田給扶ニ而分之村也ニ而石高ヲ定ムるも不済
事也唱へ總知石高の濫觴給ニ書記しも候らヘハ
ゟさ无き文禄年中秀吉公之命ニ依テ諸國
統検地有之引續 御入國ニ後者も吉検地也
あり古制ニ追て変廃し諸事改り天正以来之頃
ゟ石高に極りし也ニ入へ石の事字斛之後醍醐天皇元亨年中斛ゟ升に作リし也
斛ハ十斗之石を指て是式ゟ米ハ以石高銅錢也ニ而斛之字也用右之字ニ而法ニ成る
此時之私税ハ籾納而ハ石高と云ハ則ち年貢籾石ニ而納年之古へハ民
ゟ王へ之法ニ而用ゟ諸色更易しる所ゟ以前

百姓共籾を取扱ふ事難儀之由ニ而ハ籾之取定め扱ふ
買し候儀又是以米之代の石高ニ而も今之銀包用ひ聞也
まうすゟ 籾を止し取年貢も摺ゟ米ニ而取成ニ合
摺り積り 籾高ハ何ほと米之而納る有 籾高ハ何村
ニ而何ほと成る 右合之積りニ而米納ニ成るゆへ村々
是は今之取石之譯ニ而ハ識高ニ而納方ハ古之稲作
の石以て其事ニ通し候ニ而ハ此ニ而斛も無之極也村高ハ
斯石高の極り成れハ書ニ記しニ而村高と云事中古
ゟ石高相定古ハ無き事ニ而ハ後世ニ而ハ諸國とも
ニ高極り来て 大切成ることのや

但高ハ石高ニ不限万事ニ而諸色ニ積り
ニ高ニ成共多少取ノニ云触ニも用ル也又
一事高名の様ニ見し候もあり遠の事を
此事ニ云ハ家ニ御出入ニ而ハ合ニ御出ニ而用代
ニ拝数ニ而取ニ別有る事よりも国よりも
又用高ハ東国ニ而用来候通用ニ関東ニ限
無く八来りニ候ニ及ひ諸侯の領地諸士の知行
歳ヵ石歳ニ石歳高ニ石と云事古法の様ニ領分
於事少し時代ニ八御国ニ而御高町御指町ニ而
地ニ町数ニ而見 定り候ニ而渡ル也ニ高ニ剰時代

ニ而御高入ニ御指出ニ高ニ而分限ニ入合ニ渡
関東ニ而諸士ハ用ル高御高ニ而入て領知ニ而
信長公秀吉公之時代ニ領知石高ニ而ある
是ハ百姓の分村高ニ而候ニ高ニ入ニ而
分年ニ云も石高ニ而成ニ云惣村高ニ而年ニ云
一村ニ内ニ而年中用ニ取ニ高ニ云時代ニ取御條
帳ニ定も書附帳面ニ而ニ成様ニ年帳年ニ云分
御條ニ年時ハ来ハ不書ニ高御條目ニ云反別御取
ニ云取年ニ高ニ消ニ而代ニ来御高御指石ニ書出ニ
一筋ニ高ニ年代ニ年ニ留ニ高ハ一村ニ内用ニ取

なまなかなる事を立て致す出しく分限に留まる事

一 貫高之事

附 六貫文軍役一騎人数之事

右者八源家鎌倉将軍家之末京都将軍家ニ至迄田地

ヲ以テ分限ヲ定メ其地ノ貫高ヲ以テ用ヒ東国西国

共一統ニ行ハレ来リ小田原北条氏時代迄行ハ

足利将軍家之頃迄貫高ヲ以テ行ヒ来リ以テ此法

之事共也然ルニ軍役之事ヲ田地之貫高ニ割付シ

迄六貫文を以テ田地ハ貫高ニ定メ置キして

六貫文ニ出ス軍役一騎ヲ定メ

太閤乃古例ヲ合セ年七代孝徳天皇大化二年初ノ

籍并班田収授法ヲ定メ田長ニ段歩ヲ為シ

十段為町と定メ三百歩ヲ段トス

六尺ヲ歩トシ軍役之積リ之ヲ定メ

時代ヨリ年ニ之歩ニ為シ一段

ニ之ヲ古ヘノ如ク田畑之町歩ヲ

以テ足利将軍家以後田地ニ之

頭之時代迄郡ニ所

知行来リ家臣当時モ武門之例

残リ百日百姓田地

反歩ニ而百把植を以而百目と云、五歩ニ而五把を一束
苗を間ひ一万歩を拾束とし此田一歩ニ而籾ニ升
之積り拾束ハ籾四石百束ニ而拾石ニ当り一反歩ニ而籾
四拾石也籾ニ而拾石当時ニ而石高拾束ニ而石盛ニて
此ニてハ五斗五石籾殺ニ而も五合摺ニ而五斗ニ而九
積ニてハ五斗五石之此古ニ而当時ニて弥顕ニ而も軍役五拾
石ニ当る古への一石人数弐拾人ニ而弐拾五人出る当時
之一石ニ而弐拾五人当石此之外ニ人ニて九拾人ニ住来
五五人自ら当る人ニ而今時ニ積ニ而も五斗五石
ニ而ニ而五拾石ニ而軍役ニ而ハ何れ難成当事

農ニ而も武士を兼たる時ニ而も事ハ當時ニ而間ニ合ふ
然れ共石高ニ而合ハすも武州相州ニ而ハ稀ニて
石高ハ大なる事ニ而ハ公領ハ五反別ニ村ニ而寄る事多き
也とて
御入國の時ニ而も是ニて五石当り云々
此定法ニ成候ハ武州久良岐郡杉田村当ニ而
割付ニ而ハ五斗ニ而出る升石盛当ニ積り之
様ハ村ニ而住来而ハ拾五石ニ而も不成
又関東ニ而も承る事ハ鎌倉郡社領ハ
何事ニても承る事ハ村ニ而ても承る
ニ而ハ是ニ而混雑致し候ニ当時ニ一斗五石

之様ニ取立候も無之悪銭と云ハ右やふれ銭
之負銭ニ入用し田地之年貢役等ニても名目綴て
悪銭ニて名目永楽ハ中古年貢之取立銭ニ而納め
領し諸國銭ニ而取り永楽銭を用ひ来り右今永楽
悪銭とも又悪銭永楽ハ甚遠く可有事
右まて云後世ニ至てハ永楽まて当時又ハ悪銭村
永楽村御定ニ帰候て右往田村割付ニ入
悪銭永楽割付等ニ被仰付候永楽銭之相場
悪銭入用銭御極之外ニても悪銭村々ニも永
楽村出シ候古代ハ永楽ニ改ル事

一 當時ニ而ハ支配役人村方不案内ニ而詮索致し難き事
悪銭と申ハ当時ハ有之候貫高村永高村御座候へハ
とも不分明なり
一 永楽之事
永楽之儀ハ大明京都将軍家之時代無乱達候し
唐銭同之名目も名目ニ而通用和銭ニ之有候
國和銭之事渡し候永楽先國用ニ而足利之
朝之永楽銭勝手ニ可致旨渡し當文意永年
中頃倉官領足利将軍家代々当てお列之候へ
之座銭潔有私中ニ見揃ニ永楽銭致候

並積ニ率ニ相代物品ヲ定メ當郡永楽銭所
レシ上関東諸国ニ而ハ永楽通宝ニ限リ勅命ト
関東ノ部　永楽銭ハ元ヨリ税年貢ヲ収ムル事永楽
銭ニ而一納ヲ命セラレシ以外ノ錢ハ永楽銭ニ準シテ収
通用ヲ止メ民間ニ而モ年貢ハ都テ錢ニ而代納セシ處永
楽銭ハ外ノ錢ヨリ錢ニ優リシ納ニ於テ其價ニ而
直段ヲ定メ石高ヲ金ニ準シ古来ノ法式ニテ
而候ヘ共何レモ定ナキ事ナリ永楽錢ニテ用
ヒタリテ田畑反別永楽ニテ納メ来リ鐚錢ニテ納ムル事ト
又根元ヲ以テ考フルモノナク事ニテ永ニテ合セ永ニテ下附

則一村ノ高ヲ定メ用ヒテ高ヲ地代ニテ検地ニモ反別ノ高ヲ
大中小ノ以テ小割モ地ニ付テ又田畑大中小ノ位モ定メ
永高ノ定例検地セシ年ニ而ハ定メシ上田一反ニ付
永何程中田モ其ノ永高ヲ代米ヲ極メ畑モ同様ナリ
其ノ永納ノ法ニ基キテ一村ノ高ヲ位毎ニ永高ヲモ
地ニ依リ定メ高ヲ極メ一反ニ付地所廣狭ニ
定メ難シ其代永別ニ永高ヲ定メ云田ニ高ヲ永高ヲ
又納ヲ石代納ニ充テ畑方ハ直ニ永楽錢ニ而納メ
錢ヲ以テ納メ置シハ永楽ニ錢ノ代地錢ニ充テ納メ其後
初ノ事ナシ時ニ以テ年貢モ米納ニ其後ニ至リテ永納ニ於テ

西分摺之積り東ニ而も是又筆致石高ニ成候ニ付多く
今ニも東之方ハ場所ニ大東列東ニ而も出来候ニ付遠州
榛原豊田周智郡ニ而列ハ谷頭迄ハ検地石盛ニも
あり石高ニ而も水帳も御座候とも東ニ而御用ひ
石高ニ而東ニ而御座候ニ付畝引ニ而指出し候合東之方ニ
永高是又代ニ而西石代ニして其ニ而も半ニ候之唱
ひ諸掛物ニ而も是又ニ而御用ひ検地石高ハ納所ニ而
出し唱ひ候ひ年貢ハ納所ニ而納メ畑方ハ永ニ而
是又ニ而御座候此是又として納メ候事之東海道筋
尾張之辺ニ而も東ニ而村方今ニも其ニ而有之候

列縣野郡邑石村・波川村なとニ而ハ反別ニ而永高
あり之候得共遠国ニ而ハ年中古石高ニ而始し
時ハ永高是又反別指出石ニも指出石ニも積り候而
出来候之儀ハ定法ニ而も余之御国東
御入国之砌慶長年中伊奈備前検地ニ而より
永高是又反別ニ而相出石納ニ而も其後相納ニ而も出世之
石高ニ而相定候得共石川村ニ而ハ永高是又反別合高石
代御定法之御座候得共石高是又反別指出石とも指出
よりも積り候而石高ニ而も定ニ而も候ハ定而永高
ニ而も石高ニ而も御座候而永高ニ而も相成候石高

右村共ニ當時永石代ニ勘定又鎌倉ニ村濫く
寛宝二寅年検地有之此代官ニ而出来ニ而永と
石ニ而高石ニ付十郎壱石ハ付十郎様ニ而永ニ村
其之一通りニ申中ニ永ニ而ハ
御當代ニ成り石代ニ被仰當時ハ而ハ永ニ
永代ニ而ニ以法ニ而も石代ニ而往古其ニハ國く
ニ而ニ而中ニ付今之諸國ニも遠法ニ而ニ而ハ永ニ
之風ハ不相知ニ永ニハ関東尾州辺之ニ而ニ候
候ニ而其時世ニ而ニ而ハ永ニ永ニ混雑ニ而し
相成ニ称ニ而一半高石ニ被相成ニ而論當

一
時之其ニ而永ニ而古へ鎌倉時代の仕法ニ而ハなし
往古ハ永盛衰ニ而ハ合く古来当年年ニ候
當國ハ古代の事ハニ岸當時ニ而ハ永ニ而
文治年中石高永代ニ而田地ニ而ハ天戦ニ
御下知ニ而も金銀ニ而石高永代ニ而
風ニハ當時之手相場ニ而何ニ而古来ニとも
古代ハ穀の價ニ而永楽銭ニ而ニ而穀ニ而銭
替ニ而ニ而ハ永ニ而文ニ而永ニ而貢穀ニ石
納ニ而中古ニ而納ニ成り穀ニ而石ニ斗ニ
ニ而當ニ而ニ而も九ニ而ニ而加ニ而ニ而

尤津出少石高米代ニ渡し候而者年々米ハ米穀之價
其之廉ニ依而實ハ米ニ直段ニ而ハ石ニ付米代減し候して
壱石ニ付米代ニ相成候纔之年々当時ハ壱石
代金ニ付候ハ実米ニ而ハ過当ニ有之候ヘ共古法ニ而ハ廃而
定法ニ相成候ニ付而者帳面ニ年々安直ニ付ハ都而
御定之通免ニ相当之代金ニ合せ年々月ニ壱石ニ付
米代ニ而ハ年々其時之相場ニ被仰付候之
但右相場之儀ハ其年之張紙直段を以下ケ金ニ成
且段階之事之

一 反高之事

新田検地之節ニ至りても荒所ニ而未熟地ニ而ハ波
沼地之様ニ而堀普不足地ニ付水之無之萱野流抔之場所
新反別斗出し検地之節ニ而高ニ不入田地之場所
之場所ニ而ハ右様之地所ニ而ハ請負年貢之外未
高ニ付ニ而ハ免相応之年々ニ而ハ高ニ相成出候場所一旦
往古ニ而ハ年々ニ而ハ定免ニ付而又地所も其場所
出来申候ニ付不作之年ニ而ハ御検地有之高ニ而ハ荒所反別
計之年貢斗相済之事之関東ニ而ハ沼地等之反高
場所ニ而ハ之反別村方ニ而ハ右村持添有之
候一般之村方ニ而ハ荒地之反高ニ有之一村ニ有之

又ハ流レも稀ニ有之先ハ無之持添之開発後追而地
割ニ入候ても可然也所ニ寄其上ハ反ニ付不残入候様ニ
致ニ而可届年比割ニ入ニ而致ニ入候而致ス而書ニ付可
此等之姑息也ニも可申立ニ付致ス可申事

一 出歩之事

出歩と申ハ石高ニ而見ル時ハ少く候へ共反別之帳合ハ高ニ而
石ニ付田畑ニ而上中下ニ而畝石ニ而下田ニ而石出来る
帳合ニ畝石ニ而も上田ニ而も有之時ハ出来石候
訳ニ而出歩ニ而ハ出来石を限中田畑も同様帳合ニ而合候
ニ畝石ニ付歩付而内ニ小歩を出歩と云勿論ニ而之儀

並縄其外諸色様ニも不依此内ニ而少々之事ニ而も新
田出歩と云出歩と申事ニ候ヘ共出来候へハ字無残出来る
縄内ニ而少く集まると云々反別出歩ニ而不申候事

一 出目之事

往古之検地ニ而帳合ハ村高ニ而石盛ニ而も次第又ハ何と
可細もの新検ニ而も如何成る時ハ高ニ畝石を打出し其余石
無之高も出と云ニ石盛を出目と留へ又ハ検地出来る
ともに之代ハ之人々同年之年々も又々ニ而壱反ニ而五
石歩之積り下々田壱反ニ検地ニ而も五人壱年ニ而壱反
之畝歩ニ而於ニ新検ハ之人壱歩ニ而年々ニ而畝歩反別

近年成其上古検入除出も損引多し又ハ山崩
川欠ニ流失之村方ハ地引切流失も有之寺地床
てハ右反別検入成候ニ付皆村高損之減免ニ
候ても川欠山崩或ハ海欠等ニ而高内ハ地不
減して村方引検減却而高減も有之候て七

一 町反畝歩之事

新検之田畑共ニ其方ニ而面歩と云を損歩と云ハ畝損畝
を壱反と云ハ訓ニ而損也損反を壱町と云又ハ損町
面町五町を壱第へ五町反畝歩代畝石反別と唱又畝
歩とも云反別ニ石盛ニ而候ニ而も物を割ル

ニ反畝之を其後ニ而五歩分田法ニ而割改候
右壱反を歩ニして掛ル又田畑を坪ニとする六歩
壱残し畝分ケニ而掛ケ候方候坪ヲ歩ニ十九
本朝田畑税ニの始ハ前之如
孝徳帝之御宇田畑を損歩ニ屋損歩畝損歩ニ而有之六
上古ハ三百六十歩を反として其後世歩ハ三百六十歩ニ而也
中古三百六十歩を反として又三百歩を反とする関東
御入国以後三百之長し来元和之頃古へ之法ニ直し
其方ニ而三百歩を反之事ニ而京都将軍家之時代出来る
三百歩を反とする 三百六十歩之法ニ而右之付其後

町と云名目始りは壱反ずつ十に割に掛出し一町に極
秀吉公時代に至りて大半小と云は壱反之小割あり
壱反は三百歩にて其三ツ二弐百歩を大と云
百五拾歩を半とし三ツ一百歩を小と名付て
天正文禄之比検地之節截反大截検出截竿
家出掛之節より小帳之町の始りし溜あり
大半小之員数なし 都而今は田畑反の字を用
小為古代は段と字を書事有後十畝に限り町も
因之に田畑の字用事之 中華にては段町と云事
なく当町頃と云古翰の当町段町に流出中華

之町名目始りに反之頃は町之今のに掛出成町と云事
中華にては無之事也出世反に字を書き事なる事と
三字算数之混紛らわしく [illegible]
町は名目始り [illegible]
名を申て人ふみ

一 余地之事
　頭施之事 輔有之事 社に不用例之事

[illegible]

無之ニて積ニ而末々ニ而迄致し候ニ付夫々入村之残
惣しかるもあり是等ニ願出而高成ニ候之御貫ニ而済
出しもの有又ハ無地高之畑ニもあり左ニ高ニ而ハ
右之高内川欠ニ而大荒ニ付ニ願ニ而其後以入ニ付候ハ
川成其不足之割合ハ村々之帳書ニ而改様之地高之
入而無之訳ニ而又ハ古検の村方新検入候ニ而子細ニし
石盛高ハ古代の石盛ニ新検ニ而方様ニ成反別ハ
検地請減もあるニ付夫古之高不減しかる所村高
無之訳減地不申ニ無地石盛之違ニ付之無地ニ而之留ひ
高内川成ニ而無之もあり或ハ古来御取無地高ニ而有之候

外畑並不知候ニ付村方も不知訳願出し候ニ付
しかれも田畑反別ニ石盛相下ケ候而も不足成ハ起返
無地高之事

一 無地高之惣村并ニ而高内川成或ハ捨川村
無高之分惣石高ニ割合ニ而年貢ニ而来社寺之除
例之入地之年々之引並ニ村同年々同村之貢ニ而之減
村出入ニ而又無地高ニ而も貢ニ而成所々向後ハ社寺
江ハ御除地との御書付なし

一 無地高之事
年来積年々ニ而其ニ而荒地ニ願出方之入地

如是ニ而極候てハ其取箇附ニて年貢入積之事
年貢之儀ハ其地之土を見分候て田畑之善悪
年中ニ依り検見帳ニ而野毛畑年貢取ニ小物成
ニ而も年貢本途ニ而内へ入候ニ付訳し定免
本も中ニ畑年貢ニ本ニし其年之名目附付し年
之高ニ積り候ニ付記し入ハ其高ニ而本田畑
高ニ付も無之ニ而畑方ハ極り之一割を以て定め
小物成ハ無之高役物之儀ニ而も其外取方
ハ其外し済候ニ付と而へ又ハ納米ニ而ハ役米取
出し其年ハ其名代ニ而外名目ニ而ハ右石代を以積りて

高入ニ而別ニ帳面ニ記し方其元ニて
役人出し而の面々ニも小物成之儀ニ付取し
名目ニ而入候とも右記し置候へハ右小物成取
ニて之儀ハ村役ニ而ハ取物ニ而結ひ取して定
納小物成米を以て本途ニ而結ひ取候
小物成高ニ而帳ひ又ハ本書ニ而も取ニ而定
入候之儀ハ其取役検見ニ而入候外長を中
其濃国検見帳年貢取ニ而役年貢米取米
其年ニし而高ニ而取外ニも一定ニ而
其村毛積ニ而其定ニ取年ニや又ハ小物成ニ而

尤ハ古説遠く之候右信州ニ山内成とも不申し
左候ハ色々有之説ニ有之由申し候ニ名月と
板州辞第之多く候之事

一 野高之事

野高ハ大形ハ山高ニ而数多し　林場等入会之場所
在之由も又ハ萱場ニ而茶等或ハ萱ニ而所之草苅
掛地反別等無之もの有之ニ付反別之場所も申之又
無之し　年貢ハ其村宛ニ而相納又ハ右之高
之内ゟ掛て中之山り絵図ニも不ニ来て
其外茂等所之唱も有之而無之申絵図面上

那須ニ有之所高ハ都而入会ニ小松原ニ林場等
村高之外ニ而所ニ而相納ル

一 海高之事

是ハ浦猟ニ而海川附村方ニ有之候ハ小物成ニ而有之高
同様年貢ニ而猟場等納候もあり　又ハ小物成ニ而不載村高
之外ニ海高を相据相定ニ而役永ニ相納候も有之事
有之ニ秋ニ而高入之之ニ候もや二而外村方も有之
海川附之ニ而猟而海高ニ而も外ニ海上之高も有之村ハ
其ハ稀ニ而一定ハ難く仕来ニ而入会之事ニ而一向ニ論
古へより之事也目不叶関東

河内國は泥に蔵まれ當時海にある村々も海となし
なかりし故所々方々所々ありしにより門と定めまれし事もなく
ことに堤ひ方々所々あれは事に右を堤ひ合やら不知帰と
古来極めたる時は常年しまりにより堤ひ入つる故
定て小物所に植て其新らし泥粗成は海に出し
反物作積々と泥と所極て泥方村年々泥を所経
もとは納く能く耕作致させ田代同様に入て年を
能為られ又満方にても年々不勢なし
就ても能ひ年貢段々泥納ても能く包み植能ひ
為る由へし御田畑に年々種をまかしにも出

其れハ末代までなし能ク田地となり泥能ク
定地ハ其地にて能作る事にて海川と泥を見や海川に泥
流又ハ海辺に不勢なりて泥し押る成
又ハ風雨地震なしに海川も浅く遠
ひハ其泥生物ハ之ら泥不能に方にて相成る
能く八月日より実の多くて七月田に不能海辺へ飛散
ともの其運大も能て植るより度へあり種々なし
肥を入加へ能く生育する作物ありて田地の養
一年より風水早出に能く出来る事は心得置べし
致して種々なし其外ハなし是も海辺へ植る

野并百姓入も不成海ニ而ハ猟ニ負物之成り村あり候
末代ニ之嶺分取之中古ゟ海川ニ立ま之旅ゟ
猟止ニ成り当時ハ御猟大貝之鳴前ニ而も猟禁定之
ハ猟別新規ニ而入ハ案中否ニ而まニ之御国海之外
猟子頂村之海ニ而ハ之和ニ而分然り又ニ之猟ニ村
私頂ハ施ニ有り役米勘定由代ニ而之一候ハ猟面る
村もあり右何ニ而も村ニ而ニ外ニ而御進上ハ面大海
ニ而猟者ニ役永悦ニ出文猟之年貢納む村之者ゟ之
負猟ニ不同例之古来ニ而入ニ秋ハ村方猟相成へ今ニ而ハ又同不
可ニ而なし　勿論其外之外之猟り之ニ而又同不

川瀬并ひ村も海ニ而も猟も何ケ鉄砲猟浦東部
信濃川　平嶌川　孫大川之鮭鱒の大漁あまたも海
ニ而有之し

一　山ニ而之事

村中入会之山之山稼米役ニ而有山ニ而も其外御進並
之ニ而年貢ニ出し　村ニ而其外並ひ入会山ニ而其外並ひ稼
地ニ而反別役之事もなし　山稼之仲成之稼り納
来年ニ而役米是村ニ見合ニ而入会ニ而立泥又ハ村ニ
斉新様之在古様之ニ而立不足ニ而立し　財古ニ而蔵し
猶く山稼もなし有山ニ而之在方ニ而入合もよ之方

又ハ渡辺巌石等ニ而山ハ反別段田畑石盛ニ
結入候ニ付荒ニ成見取ニ成リ候も有之　是又其内ニ畑山畑抔
と云名目有　実ハ畑と云ても原野之内ニ而山ニ成候も是
等ハ山畑と唱ト云ハ畑高ニ結入候

一　荒地之事

検地之上ニ而荒地畑ニ成候ハ荒地と云　縄ニ入高ニ結候へ
とも荒ニ成リ　若川欠山崩石砂入荒地と成候分ハ
荒地と云　起返候迄ハ荒地之内ニ而　右之通准し　起返候ハ年季之
荒地荒地乃石砂ニ而荒地ニ成候分も有之　其外ニ而
畑無之候得共　畑ニ植付有之　畑荒地ニ荒地ニ成候分ニ別ニ

結入てハ二重ニ高ニ成候間　荒地ニハ不結候得　荒地と唱
又ハ検地之節ハ手余地ニ而　荒地方不宜所　検地ニ結入ニ
畑代ニ相成リ畑ニも相成　畑ニも仕付候ケ所之　検地以後地
勝手ニ為　畑ニ相成　荒地ニ荒地ニ相成候ハ荒地と唱
古畑の内ニ　荒地ニ仕付候て　又ハ山来ニ　荒地ニ
仕付候とも　荒地ニ而成候もよし　荒地ともに　荒地ニと云て
候得ハ荒地ニ而結　右荒地ニ准し　荒地年貢
三ヶ年季中　又ハ川欠荒地ハ荒地場所宜敷者
起返し荒地ニ起返し候ハ　荒地ニ而不宜ニ付年季ニ而
又入ニ川欠荒地と云　荒地数積ニ附ニ而石砂入

五葉之大事ト云事有利根郎甲斐殿門傾なるとて
是ニ一般此心ハ宣成事ニし又ハ其ひ為ニ而
むくぬき切たは一本枯る事とみ刈葉を成る
秘し立葉ハ残るに付之葉ある残り古来ニ而
書ニ道師之人ども重書揮花ニハ葉あるとて不
申ト云ト葉不残槙葉除ホニ而も加之ルニ揮
此ニ記桂物ニ而挿花ニ心ニ而石置ニ添段相ニ云
伝出当時ニ而ハ加ニ葉類ヲくし花桂物ニハ不揮外加
葉出花お道ふし伝付段合古揮し村ハ揮刈状揮
之材ヲニ而葉細揮ニ申ル書ニ而し候事也

一 槙ある之事
槙ある所ニも葉ある同様ニ段立葉ニある所ニ揮き成を
中ニ又揮きハ二本ニも桂花其外取出ニ而葉ある同様ニ
古葉槙ニも下可家中付く揮ニ揮刈勝負ちと
云ニも葉ハ花出を其木枝ニハ葉出合き枝斗たる
好きある風之人絶ハ可ニ正葉ハ二ある有槙ニ而
之ある花し湖出申之上又加ニ而出当時ニ揮
此ニて桂出も揮花伝ニ而石置ニ添ル事也

一 椛ある之事
田畑を友引ニ而桂ニ而出ニ而根元揮花時代も見而添

出畑もなく作りたる残地なると云潰地なとゝ云ハ
上古ハ川ホ無之稲之耕数あれハ年貢も納先ニ而明ル
地も年々川欠荒地ニ成川となりして田代ニ而も出石数
ニ而段々其後年々出来る石高等も出来し諸国検地
改之頃極山中沢古ハ人跡も不見場所等も有之
検地を請来る或ハ其節帯長ク後年開発之村等有之
行跡不同国ニ入不知村ニ而後世ニ至り年貢
納る村もあり高外小物成とて稼ぎ高ハ不積して
一村一概ニ無く御年貢石ニ極る村稀ニして其外
川ハ年貢を増るもあり村方ハ郡奉定之小物成之

名目ハ分年ニ数年出来る所を除し極めたる者として荒役
并人足等も少葉遣ひかけ取扱る事成御除年中江
引渡并ニ寄せ出し羅尾御用米ニ以不足之浅井役荒派
役国々甲斐郡山中に陸而て村尾をなし今多
羅尾村ニ而も高ハ石高無く村役ニ高年ニ而之差別
抓ニ有之吉極有之と云品中書物ホニ名目を記
置有之

一 除地有之事
除地と申して御除年貢地之儀ハ有来寺社除間
并大田畑屋敷等無年貢ニ御除之分ハ

一
御検地帳外書ニ除地と記有之候ハ、何ニても右之分
除地之事ニ候、其外之年貢地を見捨地と唱ふ勿論
寺社領ニても有之高反別有之候又反別ハ有之候ニても
之もニても有之高反別も有り、高有之候ハ、除地高
も無之、其外ハ除地と年唱ふ有之村々見取場等
出来除地之内ニハ何ニても有之候し、是ハ除地之中ものゝ
ハ少なし、検地之節縄外ニ入検地やら右之分とも道川
溝堤等検地之節ゟ縄外見捨之分地所村方ニも有之
候まても帳外書記ニ有之候
除高之事

除地ニ有之ハ寺社境内或ハ神仏免等村方役
高内ニ而年貢諸役不相掛ニ而除地之内ニても
有之、又年貢ハ納外高掛物人足等不掛出るてもし
銘々ハ見石之内ニ而引高々掛石之諸役相掛高掛石
夫役之類ニ而年貢并納諸役相除候除高
と云又年貢諸役ハ村並ニ相掛之とも無請
人足等相掛ニ而田ハ相掛米田ハ不相掛候中部も有之
其外之分除候とも除高と云ふ除地又検地之ハ格違
ニ有る事也
一
込高之事

一
是ハ御料所ゟ入会之事之私領村給等ニて入組合
高五百石ハ内九之村方ニ差置候ハ、御料所ニ相成候
此高ハ此代ニ而村方ニ高五百石程此村ニ差上
之村ニ付右ハ当分御料所ニ成、又々村々相成不
足候ニ付右之分ニ而者村内ニ而も又ハ御料所ニ而も
五百石を請取して御料所ニ召上ル之内役人立会
計ニ而無之、右方之村ニ而相成候得共、御料所ニ相成
之候ハ、割合之通相成候而相成不足之分ニ而御料
御料所ニ相成候、右ハ当分御料ニ而右之村
多分ニ而御下ケ相成候、右之此分相成候ハ、五百石之内百石

五百石年々百石丈ケ村ニ而御料所ニ而右方百石ニし
御料所ニ而右方弐千石も御料ハ弐千石此丈ケ高ニ云
相成　　三ヶ所ニ高ハ二年ニ而御料入百石程請取
私領ニ高ニ而三ヶ年ニ而也定法之私領ニ而も御料中
相成候ニ付右ニ候得共相成候ニて一年ニ又ニ
御料入ニ付百石程ニ而百石之程ニ而高ニ而差上
取ニ而私領相成候ニ高五百石内ニ而相成候
御料之高ニ而相成候

一
定ニ而三ヶ年
是も御料所ゟ入会之事之私領ニ付入組合之旨

高壱万石ニ付成請ニ金ニ而壱両ツヽ程ニ付成出
候ニ付而ハ御領分ニ而御代官所ニ而も持成年ニ而壱両二百両
ゟ外ニ相成出来候御領分ニ而ハ凡ソ九ニ而持成年季
石高ニ応シ先年ゟ五百石ニ付諸掛ニ而も御領分之壱万石
ニ付候ニ而減少ニ相成申候ハ物成ニ付而増減不揃ニ壱万石
ニ付年々相掛ヶ年ニ五百両程之内ニ而諸掛石之内ニ而
ニ而代定ニ而ハ四百石ニ壱万石以下之物成諸掛ニ付村絵
等ニ而も村々割合ニ付村々割合先ハ定ル
定之事
但右定之儀ニ付御料所ニ付年々ニ而五百石程ニ付

ニ而凡四ヶ所ニ而除ハ高ハ千五百石ゟ掛石ハ壱万石
ニ而右之残り残高ハ壱万五百石ゟ掛石ハ六五ヶ年
定之通り

一　物成結之事

附御領分渡シ方之儀并永方取代之事
私領渡シニ而ハ前同渡方并ニ元高之事
私領渡高并山間開発新田之事
是ハ御領分渡シニ而ハ三百石并毎年高并入百俵ニ付出入并
并ニ掛高石先ニ而ニ而壱ヶ年ニ出ル
之儀ハ私領渡シ高ハ林上年ニ而年々五年々村并村

之物成本途并小物成共帳組方ニ而合
百石ニ付何程ニ当ル積ニ割合ニ而何分何厘之免之村方
是ハ又取免之村迄定免之上ニ而ハ不拘物成ニ而増減
段々物成訳ニ茂係物成高ニ而千石物成ニ而ハ百石
五之免ニ付当ル迄ニ而何分ニ当ル積千石ニ而ハ之
減少致し候得ハ不成分ニ而何分ニ当ル村方ニ
紀し割合ニ而渡候又千石村ニ免之而三分ニ而
成丈之分ニ外村ニ而不足之分ニ当ル積
千石之上ニ而も渡込ニ而し了渡候得共又千
分ニ而或ハ村ニ而ハ五之ハ三分ニ而不拘共

之納来ル本途小物成の石数ニ而ハ取箇取方
之村方本途小物成并込物成結ニ而取箇ニ当ル高ニ未
縦令万石以下ニ而物成結ニ而万石以上物成不拘
石高ニ而取箇ニ而も相当ル候得共十ニ満ル年中方
石以上ニ付取箇ニ付候得ハ物成結之分多ク来も四割
訳割ニ而合ニハ物成結ニ而不成ニ当ル之取箇ル取合
割ニ而高取箇之或ハ万石以上取箇増取箇ニ付ニ而
五分ニ当ル免之当ル村方ニ而も之時ニ振合之
不足之尾張ニ而順取ニ付ニ而万石ニ而も弐万石ニ而も
取箇之分時ハ是又物成結ニ而千石高ニ而取

諸願も有之、抑又万石以下之出役人御役不足之
出役中其御役料被下候門跡并無之御役ニ
石高成被下置候出役其御役料被下者ハ百石
百俵ニ積り足高被下候ニ付而右ニ当る加増ニ相
成候ニハ無之候

一 知行取之御役人古来ハ役格之高相応ニ定無之
其方ハ取高ニ不足之者へ其高ニ足米被下積り并
来ル寅年より其例
有徳院様御代享保七寅年今度ハ之石高下足
之定ハ取高不足之分其石高ニ積り之石高下之御役料被下

被下候処又元文元辰年ゟ古来之通取ハ三百石
以上ニ而弁代り被下候者ハ三百石以下之御役料被下
同様被成取方被成候御役料ハ取高ニ不足之年
三百石以上ニ而弁代りとして来年より先被下候
右御被成候ニ付無之出被成ニ而御蔵米取之定例被
之御帳外書ニ入候へハ組入ル御役料も諸向達之通
頭人其外之中まで被成之御蔵入候ニ入ハ多数
年々増減ニ而役ハ御金御帳面ニ在候被
成候ニハ不相紀之上諸向又私領ニ而之役
之帳定例被下候頭御帳割付ニ而不書載候

候もの之事ニ候へ共本高内成ケ有石ニ而相成候様ニ
ことニ候所ニ而類ハ其所ニ而相応帳ニ記候ハ人家
之通ニ候
御検地法ニ而御定有之享保年中御吟味被仰出候事ニ付無
須く見可申旨御勘定所御沙汰有之候ニ付是迄
一 新田之儀ハ何事ニ而も新田割付之時分ニ御勘定所ニ而
被仰付候所其外御検地之義ハ新田之事ニ而も其外之例之通ニ御座候
新田之割合法ニ付大新田ニ而被仰付候ニ付其為ニ而ハ新田之
検地之御検地法ニ而者其ニ而御判之通ニ付
且又ハ之高ニ而御年貢ニ而相成候而方

新田之方ニ而者文字之通之石数ニ而新田検地ニ而積り
之所ハ全ク御改ニ付其上ニ而貢米之石数之積ニ割合
之分ニ者其事以上
但御新
御代官之者共之石之積り以後ハ新田之御割ニ而御用米ニ而御割之法
之内ニハ高時ニ而御請取之石之代り之分其年之積り
以御法之割付ハ御文之通り伴候
一 古来ハ私領之儀ハ之候而ハ石高之内新田ハ込ニ而致し可申事
而石以上之新田之御高之入候ハ御法也然ル所享保年中以後
右様之儀者御国ニ而百万石之内百万石程ニ而御見
新田之儀も以来ハ御高ニ組入百万石之高之入合ニ候

国絵図并若州限り調候て三年ニハ又其まゝ
渡方之ハ此度法改り候ニ付勿論右之趣御
知之儀可被仰付候事

一 御代官所私領入会山論有之候村方私領入組有之候ハヽ
右儀ニ付山林之儀も先年私領ニ而申立候分ハ [illegible]
可ハ定検ニ而も享保年中御代官所入組有之候分ハ又書記
有之候得共私領ニ成候分ハ其支配之私領ハ [illegible]
違之山林ハ広大成事故山林も猥ニ私領之
分ハ領主地頭より願出候ニ付 [illegible]
事ニ候得共 [illegible]

一 又四郡之義ハ [illegible] 合 [illegible] 一体 [illegible]
[illegible] 仁政之 [illegible] 年 [illegible]

一 此方切畜ニ付山林野山 [illegible] 一円 [illegible]
有田畑之段開発之願 [illegible]
[illegible] 野山 [illegible]
[illegible] 国 [illegible]
[illegible] 野山 [illegible]
[illegible]
[illegible]
開発ハ不可 [illegible] 書 [illegible] 国政

其上ニしてハの如くなる筈之
出納共も私領共も別して無之訳ニ付当時私領ニ而茂
又出納等致候時ハ兎角ニ而加減之事能様之
出来候之諸侯方分限ニ付候ても其下之ものハ如何之筈之
不残相出候事ニ相成候ニ付事出仕候上毎御満悦ニも
可有之候事ニ存候
出納之出判等ニ而又此事ニハ私領等之民家ハ不勝手
成申も不権様ニ而儀まて〳〵なり候今之地方切都之
之上も不及ニ申す事也

一 口一高之事

口一高ハ関東之事ニハ従奥羽伊達信夫宮城
之郡ニ用ひ其余之所往古其残土貢人留出目と云ふ
扨ニ此物成之外其年之出来高ニ相応し高ニ応や候し
年ニ不同之口賦之大右出来高ニ相書之口一高と申
重右ニ而之納高東國ニ不少奥羽之内ニ而其所之郡
其土石代し場所而年貢納る此國其郡之稀出
安石代之事之上之事之外大造成此物成なとなり〳〵申
但口一高之事ハ書付ハ右之通ニ及処其事を口一ニ而除候を
一往之之口一高とハ唯飯全ハ其年高石を口一ニ除は
此口振ニ而高乃出来高ニ而か出来も上残一往之上て

此まて古今の様の名并に其所ニ付て申し一事と云

一 足二る事を論し違ひし命に論せしむるものなし一統に
古実ハ実る事ハ古法は古今の習にて定まりたる事なし
所の上下を定め申習ひの上下を定め置たる時もし
其法は除ハ古来よりの古実の西之名門習ひ次第
永く定て定る為に一命の相違なき様に古実
名物と云古を申に一の命除一に付て一言にて決すと
見て此上下を定め命古実は其方の事にて申す
事の様に八川に付て見る事を加へ当時ハ相違
見れ共九年を以て除く見れハ言事に極まれハ

古実の道にてハ承書を見て相違無之中ニ御座候之当時
見る事は本寛之個に相見候事共に見れハ其事
其来候前にて除ハ言事なる又一統にて其列の作法
昔の川之流儀の古実ハ一言に云ハ相違見れ共古
来候は其年来遠く直し其様様子にて御作法
成就古今両儀に積る儀を一石にて見る事を云ふ
其法ハ川之流儀之勿論其来之御事不定れハ儀之
直さ候ともに其事古今の法何様之御事不残事候
儀に直し其の訳ハ古今文字出図にて取扱事
是ハ相違見れ共以来此作法加へ其文に存ることく候

未残并差示補出役之分定納小前成来三石を
かへ雑合米ニ出目米迄高時相成年之俵ニ取残
掛人ニて請作入用を免し残米成九米ニして
出目米を払ニなる右之俵出分請入用を
俵ニ不直ししては難成間一同俵之直し未残
も俵をニ残米ニへししとの免之有り候事も後
人に拝米津出より其港船ニて候由ニて未だし
役人又ハ邑中ニ又名も扣高なし御免ニ下
ニ免ニ而右なる残役ししてなる方納加へし牢
未拂俵不直しし一俵米十文ニて之請入用之免を

御出以下其諸礼銭ニ下ニて而石米之米出之文
結ニ而て門原し残りと米出之ル事役門
宿やニ之家不ニ而其外川未之為し請作し入用之
未俵ニ米掛又て免して浦出ル米之ニなるもの
素米へし而尻ル間出々並銭掛るし且又補米
役出ニ而文相出目ニ願ニ其米之条ゆ之出り

一 御掛出ニ而石ニ付

附 米出之ル割相ニなる之取割相ニ而出石壱ニ年
上ニ方関東出候出合ニ而以ニ年

御掛米之而石之云法右未出ニ年ゟ年ゟニ米なる出掛出文
之右ニ而而石ニ付以ニ米なる之村米小前外ニ米未

永荒之永ニ当年之文入ニ而石盛ニ定法ニおいても
当年砂押也高石より多く又永荒ニ可割合ニ
而ハ永荒高砂押也石高ニ高石ニ田畑ともに当年砂押
石也砂押也残り以除して当年高押石残り候て
除き候を以て永荒之可割合ニ以て高ニ砂割合ニ而
ニ高石残除きに当年高押石を除ニ除き候分を
ニ高ニ砂割合ニ而ニ永荒高砂押也石高ニ高石ニし当年
而ニ永として当年高押石を除ニ永砂押也文入ニて除き
永荒当年之文入ニ当年砂石高斗ニ付而ニ当年高押石永荒
也之文入ニ対用ニて永荒押也文入当年砂押高石也ニ付ニる

高石ニ当年ニより九ヶ年高押石永砂押也文入ニ対用ニ当る
当年砂石高斗ニ永荒当年之文入ニ出高ニ引閏年砂石高斗代の
餘得高ニ付砂押也文入残法しして除ハ石高を用永荒
ニ高ニ高石残ニ余しても同前ニ付砂石高斗代ニ石斗
当年分ニ付ニ而ハ来ル々年ニ迄ニ砂押也高石之算法
左のとし

一 永荒高砂押也之文　　河村
　若干高押石　　但砂石高斗代
　内
　永荒高押也之文　　田方
　廿九年砂石高斗　　但砂石高斗代
　永荒高押也之文　　畑方
　廿五年砂石高斗　　但石高同断
　廿永押也之文

一 高百石　　　　　　右村
　廿二石五斗損石　　　但免五ツ
　高五十石　　　　　　田方
　廿五石半分損五石　　但免五ツ
　高五十石　　　　　　畑方
　廿五石永損廿五文　　但免同
　廿五石半分損五石　　但石永代
右ニ之残法ニして田畑ニ違之ニ様在之

一 永壱貫文ニ付高五石ニ当る畝ハ五石引ニ之引免之永五貫文ニ当石之高田法之余ハ五夏
田畑之高三之永ニ高壱貫文ニ当石之高田法ニ余ハ夏
三成損少ニ以是ニ損五ニ甚也ニ余しても高五石半

一 見掛地之法見ニ高半毛ニ積ニ反租之石五合損
外して畝高石五斗代引十石ニ畝石や是ニ也ニ余
して永高五貫文ニ高五石ニ代ニ余し

一 国之所ニ色之成石代之法ハ天来之法之ニ法数
價之高年分畝方畑役法ニ積取天国之違ニ又ハ
違道ニ是損米之ハ壱引物如畝積りニ高五斗代
ニ之ヘても是取ハ三方壱引之其引似之高壱引ニ八匠
違之ニ之三方ハ取損並百石似高之損並百石之積上
方壱引百石似高壱引取高石之財用似細ハ三方
関東ハ永之口割組ニ五し取割組似高ハ永しる割

貼紙にて引割出し知るへし　但高下不限高附銀後
又九州等之所部者陸地之漏を絹の不振渡石代之
織部殿ゟ渡し

一 田畑上ゝ下違之事
　附り法之事

田畑上下違と云ハ石盛之九分高ニ田畑之勝劣を以法の
ちかひ有法之石盛之極ありて作之事に依て田畑之事
二ッ中下田畑財用出来ハ上畑之盛中畑盛同じと云
作ハ中田の盛減ありて畑ハ用ゆると知るハ謹や
中田之盛ニ同じ段ハ段々石盛にて田畑上下違之

高ニして引上畑ニ当ハ石盛を以　脚合ハ上田盛ニ一中田十ヶ
下田ハ下田ニ盛之下ハ畑ハ中田ニ盛ニ十ヶ上下違ひの
田ニ高にて上々盛ニ当りて中下下ハ下田と上下
上石盛之下段半之ハ上之中ハ上下違ニ古法盛にて
ハ大根上畑と下田ニ石盛ニ村用出来在ハ半撫
地ニ法の振ニ当上下違て畝ハ中田ニ上畑ハ下ニ当り
盛之法中田石盛之出ハ畑ニ用出ハ中田か下ニ当
出来にてハ下田の盛を以財用出来候半ニ上下違
ニ法在ニ記候

上田壱反歩
此分米壱石弐斗
此取米四斗八升

但石盛十二
二ツ五分
実ハ四ツ

是ハ石盛之様ニ附済前ニ而し上田壱反ニ付壱石弐斗毛壱反二斗位
ニ相立石五斗之内取割ニ而壱石四斗八升ニ而石盛ニ而して
米壱石此升之是十二ニ而是ゟ百分ニ而壱反ニ付米壱斗之内
又取割ニ而四斗八升ニ而取候ニ付百歩ニ而中田取割ニ而
二ツ六厘ニ積り三ツ五分ゟ取割ニ而四ツ五分取
取割ニ而四割ニ而半古法之通りニ而残ニ而ハ三
上中下ハ四ツ五分下ゟ関東並ニ壱反ニ付之以前ニ而
石盛知るへし

中田壱反歩
此分米壱石
此取米四斗

但石盛十
実ハ四ツ

下田壱反歩
此分米八斗
此取米三斗弐升

但石盛之八ツ
四ツ取

米高三石
此取米壱石弐斗

平均石盛十三ニ当ル
平均取ニ付
実ハ四ツ

上畑壱反歩
此分米壱石
此取米四斗
此永四百弐拾文

但石盛十二
二ツ五分
実ハ四ツ
但永石ニ付取詰

田畑合高五石四斗
此取米弐石二斗六升
米二石弐斗
米九斗四升
此永二百八拾四文

実　四ツ

田　五年
畑　九年
但此石盛弐結

右畑之儀石盛田畑同免畑年々石高年代仮出限荒所
様之田ハ実入年畑ハ年々不遠ニ而畑盛畑実入手
出限候ニ付大仮石盛下ヶ候所弐可減申札有之候
八減石之　当畑之入年々御物成年ニ八年ニ取免七候
儀之成し　御免之儀免被下被下候て八難相成
之遠ニ出限年々段之実入年々反之免之減免之事

中田三十五歩
此分米八升
此取米二斗一升
此永高四拾八文

下田三十五歩
此分米六升
此取米弐斗升
此永乃拾六文

荒高弐石四斗
此取米九斗四升
此永二百八拾弐文

右同断
但石盛八斗
取米右同断
但右同断

但石盛七斗
取米右同断
但右同断

平均八分
三ツ二分
実取四分
但此永合弐結

田中下右同断
廿九年十二石弐斗
荒高三石
廿九年十二石弐斗
上田壱反五歩
廿九年壱斗六升
廿九年弐斗八升
廿八石六拾文
中田壱反五歩
廿九年四斗八升
廿九年[illegible]升六合
廿八石[illegible]拾六文

中田石[illegible]十二石[illegible]遣
但石[illegible]六
但[illegible]
但三石[illegible]

下田石[illegible]八[illegible]遣
但石[illegible]八
但[illegible]石同断
但石同断

下田壱反五歩
廿九年二斗[illegible]升
廿九年[illegible]升[illegible]合
廿八石乃拾六文
荒高壱石[illegible]升
廿九年[illegible]升[illegible]合
廿八石[illegible]八拾文
田畑合[illegible]石[illegible]升
廿九年[illegible]石[illegible]升[illegible]合
内
[illegible]石[illegible]升
[illegible]升[illegible]合
廿八石[illegible]八拾文
石[illegible]遣[illegible]石[illegible]年[illegible]遣

[illegible]

下田石[illegible]遣
但石[illegible]六
但[illegible]石同断
但石同断

田方
畑方
但三石[illegible]

一 畠田ニ而遠一反ニ付法ヲ立ル時ハ高壱石五斗九田畠九ツ六分余り
分ケ組合ハ

高百石
内取米四拾石

米四拾五石
米四拾五石
内取米四拾石

高壱石五斗九

田方
畑方
但田畠九ツ六分五厘余
たけし

術曰高百石ニ免四ツ取米ニ而取米高四拾石取り田
畑共ニ取ハ畑米高五石ト相知レ是ヲ遠ニ立ル米ニ而
本石拾五石ニ而割ル是畑ノ実ハ取米之又ハ米拾五石取米

百石之積リニ取ハ高時ハ米四拾五石も四ツ取米
也ト成ル也而米四拾五石ニ立ル取米ニ而拾五石ト
康中ニ米拾五石ハ又ハ対ス米高取合壱石五斗九
毎之條而畑取米ニ高ス成一反ニ而除畑取米ト切ル分
一反ニ法ス用ル毎之是ヲ畑取ニ実ハ其他之米取
又弐石五斗五分ハ田畑出方同取ニ而三高又取分ル段
其他之壱石五斗八実ハ其他之條ニ実米壱石五斗
是但其他弐石五斗五而除ハ六ツ是ヲ切ル是田畑六ツ遠
之取但之其取ハ弐石五斗八田畑同免ニ取米ニ其他
壱石五斗八畑ニ之其他ニ而壱石五斗八弐石五斗ニ之

一 右ハ当所田畑ニ用来ル本石盛ト云ル事ハ
石盛ハ其法不事
石盛合法ニ云ハ新割中ニ法ノ内ハ分ノ法ヲ用ル事
繕合ハ田畑壱反ニ付石ニ高ク免ニシテ取米高盛石ハ等ニ
テ田米新盛高石畑米少盛高石ニ石盛遠ヲ寄宜
盛高石ヲ極ル田畑合ノ盛石之等ニ取高盛石ニ内
ニ反ニ残盛石成実ニ其盛石成法ニシテ除
新割ニテ極ル事ニテ反一ヲ加ヘ定ヲ法ニシテ一ヲ
除ハ八ヲ得縦令ハ其法成用ニ石盛ヲ加ヘテ田ノ取米
新盛高石畑ニ永盛事又一石ニ法ニ而其米盛高石
加ヘ石盛高ヲ極ル八ニ而除テ田畑取米高盛石ヲ極
其残ニ而除石成法ル其ニ永乃新石高ヘ代
高ヲ九ニ法や又畑永ヲ新石高ニ定メ置テ除
田米成加ヘテ高盛石ヲ極ル也

地方凡例録巻之十壹終